本を選ぶ

NO.438 2021年(令和３年)11月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

http://www.las2005.com

本社 〒114-0002 東京都北区王子4-23-4 TEL=03-6908-4643

●<ろん・ぽわん>川の街、石巻の〈一箱古本市〉

●大学教員ノート 第６回

●「今しかできないことを」－フランス旅行③

●司書の眼 第４６回

ろん・ぽわん

川の街、石巻の〈一箱古本市〉

•丹治 史彦•

コロナ禍の２年間、各地で開催されてきたイベントは軒並み中止や延期を余儀なくされた。2012年から始まった石巻の〈一箱古本市〉も例外ではなく、毎年７月末にしていたものをコロナの状況を睨みながら10月に延期し、規模を大幅に縮小してどうにか開催にこぎつけた。

〈一箱古本市〉とは文字どおり一箱ずつの本を持ちよって開かれる古本市で、東京の谷中・根津・千駄木地区、いわゆる〈谷根千〉エリアが発祥。被災地に本を届ける〈一箱本送り隊〉の呼びかけ人でもあるライターの南陀楼綾繁さんが提唱して2005年にはじまった。古書店ではなく一般の人たちが参加することも大きな特色で、いまや全国各地で開催されている。

避難所や仮設住宅に本を届ける活動の中で石巻の人たちとつながりがうまれ、何度か茶話会を開いた。その中でかつてはJR石巻駅周辺の中心市街地に10軒近くあった書店が震災前からゼロになっていることを知った。生活圏に〈本のある場所〉がなくなったことがさみしいと感じていると口にする人が何人もいた。交流が深まると70年代からの各種雑誌のバックナンバーを大切にコレクションする人が幾人も現れた。全盛期にはタウン誌が数誌発行されていたこと、映画館、レコード店も数多くあり、石巻という街が北上川の河口港として栄えた歴史が独自の文化を育んでいたことが見えてきた。しかしそれらもすでに過去のものになって久しく、そこに津波が襲いかかった。川沿いの中心市街は被災したが、私たちが出会った石巻の人たちは文化を諦めてはいなかったのだ。

街に本を取り戻したいという彼らの熱意に後押しされるようにして、2012年７月21日22日の二日間､第一回〈石巻一箱古本市〉を開催した。〈送り隊〉は一箱店主、ボランティアスタッフとともに約40人のバスツアーを組んで移動。石巻駅からアイトピア通りにかけて１キロほどの間に６つのスポットを設け、街を廻遊する形で一箱古本市、古本バザー、益子の陶芸家ら有志たちによるカフェ、プロのイラストレーターのワークショップ、昔の石巻の写真をタウン誌の編集長らと見る会、映画の野外上映……本を中心に据え、様々なイベントを企画した。「街なかをこんなにたくさん人が歩いているのを見たのは久しぶり」という声を何人もの人から聞いた。

コロナ禍の今年、どうにか10回目を迎えることができた。初回から欠かさず出店している一箱店主も複数おり（その一人は先の雑誌コレクター)、顔なじみも増えた。その一方で新規参戦の人たちも多い。川風に吹かれながら本をはさんで会話を楽しむ人たちの姿に、〈復興支援〉の枠を越えこのイベントが石巻の街に定着したと実感している。

＊つづく＊(たんじ ふみひこ：信陽堂)

大学教員ノート 第6回
－出会いと経験－

石川 敬史

理念、ビジョン
——とは何のためにあるのだろうか。
中期計画、目標管理制度
——とは何のためにあるのだろうか。

新宿西口駅の前——〇〇カメラではなく——以前勤務していた大学の立地である。高層ビル群に囲まれた28階建ての理工系大学。建物内の縦移動が中心の大学のため、エレベーターを長い時間待つ落ち着かない時間がとても懐かしく感じる。ただ、大学図書館（事務室）は地上に近い2階だったので、地に足をつけて仕事ができる環境であった（と思う）。

他の部署への異動を命じられたのは、いまだに駅の工事が終わらない新宿に通勤して10年ほど経過してからであろうか。正確には図書館との兼務であったが、向かう先は「総合企画室」という「小さな場」であった。周囲の視線が気になるこの「小さな場」は、組織図上では、事務局組織ではなく常務理事会を「長」とする部署で、私を含め2人ほどの人間で成り立っていた。

まさか、ここから文字通りの「怒涛」の日々が始まるとは思ってもいなかった。

常務理事のＡさんとは、よく相談し、よく打ち合わせし、よく注意され、よく指導いただいた。ほぼ毎日、常務理事室を訪問していたと記憶する。物事の目的と本質を洞察する意味を常に説いていた。某電気メーカーの執行役員の経験——かつては20歳代でタイの現地法人社長、かつてはオーストラリアの鉄鉱石の調達、かつてはニューヨーク赴任中でのＭ＆Ａの経験など——から、Ａさんの言葉のひとつひとつから、Ａさんが意図する意志や背景を読み取ることを学んだ。外資系のコンサルタントや国内のコンサルタントと接し、仕事の方法や物事に向き合う姿勢を眺めることができたこともＡさんのお導きでもある。

もう一人の常務理事であった化学系学科の教授Ｂ先生とも、よく相談し、よく打ち合わせし、よく注意され、よく指導いただいた。ほぼ毎日、常務理事室を訪問していたと記憶する。いわゆる「打ち上げ花火」のような派手は研究ではなく、材料系の基礎研究・基盤研究を重ねる重要性を会議のたびに指摘していた。学生に対しても職員に対しても教員に対しても熱血指導が定評であった。先導的事例の把握や筋道立てて説明する論理とともに、仕事への熱い「想い」を持つべきことを学んだ。工学系の教育学会の大会にお誘いいただき、研究発表を重ねることができたこともＢ先生のお導きである。

確か当時は学長企画室のトップであったＣさんとも、よく相談し、よく打ち合わせし、よく注意され、よく指導いただいた。ほぼ毎日、とりわけ夜の時間に学長企画室を訪問していたと記憶する。学園の今後や大学のあり方、仕事の進め方、大学での細部にわたる調整方法など、他者の視点に寄り添うＣさんの「想い」や考えから大いに学んだ。数々の相談にお付きあいいただいたことは感謝に堪えない。筑波大学の大学研究センターが開講している履修証明プログラムにも共に通い続け、大学関係者とのつながりをつくることができたのもＣさんのお導きである。

「小さな場」の前任者であったＤさんとも、よく相談し、よく打ち合わせし、よく注意され、よく指導いただいた。ほぼ毎日、メールか対面で互いに相談しあっていたと記憶している。学園の未来、プロジェクトの進捗、人間模様、会議の進め方など、時には仕事中に缶コーヒー片手に1時間以上話していたこともあった。5歳前後年下である私が先に課長になってしまった時は、真っ先に「小さな

部屋」にやってきたことを覚えている。夜のアルコールの場になると、Ｄさんは陽気な人間へと変化することは有名であった。アルコールを少し手にした後、「小さな場」へ戻る器用な技を習得できたこともＤさんのお導きである。

「小さな場」への異動によって、実に豊かな出会いを経験した。

始発のバスで出勤し、終電で帰る――もちろん夜はアルコールの時間もあるが――を繰り返して「小さな場」で取り組んだプロジェクトが、若手教職員を中心に展開した「学園のビジョンづくり」であった。新宿西口駅の前の校舎のほかに、八王子北口駅遠くの校舎（バスで 20 分ほど）と、中学高等学校を擁する学園であったため、さまざまな関係者・意見もあった。週 2 回、朝 8 時からの会議を重ね、暗いトンネルを手探りで進んでいた日々を思い出す。もちろんこの他にも、中期計画や事業計画の策定、目標管理制度の設計と運用、ニューズレターの刊行、他学園の経営分析、1 年後には学園広報の機能も加わり「小さな場」の仲間も増えた。「小さな場」の気温は常に高めであり、活発に意見を交わしたことを記憶している。

課長補佐、そして課長という偉そうな役職であったが、鮮明に記憶していることがある。それは福島（白河市）への合宿だ。理事長、常務理事、学長、校長、部長、若手教職員のプロジェクトメンバーとともに出かけ、深夜までアルコールを手元に議論を交わしたことは今でも忘れることはできない。役職、年齢、経験は関係なく、忌憚なく学園や大学、中高の未来を語りあい、議論しあう時間は、今振り返ると贅沢な時であった。

もうひとつ鮮明に記憶していることは、学園の教職員に対してプロジェクトの進捗を説明する場を「創った」ことである。確か新宿校舎の 28 階会議室だったであろうか。2 ～ 3 室を 3 日間程度占拠して、説明資料をポスター形式で展示した。コアとなる時間帯には、若手教職員のプロジェクトメンバーが同席し、学会のポスター発表のように「来場者」と熱い対話を重ねていたことを思い出す。

「小さな場」への異動によって、実に豊かな仕事との出会いを経験することができた。

ここまで淡々と思い出ばなしを刻んでしまった。「小さな場」――プロ野球の珍プレー好プレーで放送されたかつての乱闘シーンのように混乱したこともたびたびあったが――直観や思い付きによって走り始めるのではなく、すでに先を歩み考えた人々から学ぶことを心がけた。それが本であった。

数々の困難を乗り越え、組織内を変革に導き、組織を育むプロセスの本質を描いた物語が『プロジェクトファシリテーション』（関尚弘、白川克／日本経済新聞出版／ 2009）と『大学は「プロジェクト」でこんなに変わる』（WISDOM@ 早稲田／東洋経済新報社／ 2008）である。『コーチングの基本』（コーチ・エイ／日本実業出版社／ 2009）には人の魅力を引き出し、導く心構えが繰り返し述べられていた。『現場力を鍛える』（東洋経済新報社／ 2004）と『見える化』（東洋経済新報社／ 2005）など遠藤功氏による一連の著作に触れると、時間を忘れてしまった。分厚い記述の『ビジョナリー・カンパニー』（日経 BP 社／ 1995）からは理念の価値を学んだ。

これらの本は、Ａさん、Ｂ先生、Ｃさん、Ｄさんから薦められた本である。電車の中や寝る間を惜しんで活字をたどると、経営という概念には共通する思想が流れていると思うようになった。それは、管理や排除や評価ではなく、時流に流されることでもなく、出会いと経験を育くみ、引き出し、共有する意志である。そのためには、真摯に向き合う姿勢や読み取る洞察力が求められる。

「小さな場」への異動によって、実に豊かな本に出会う経験をすることができた。今でも学生と接するときに、走りながら考えたあの時の轍を振り返る。（いしかわ たかし：十文字学園女子大学）

「今しかできないことを」－フランス旅行③

溝上 牧子

旅の様子もこれで３回目。そろそろ飽きてきた人もいるはずだ。さて今回は宿のことを書きたい。

最初に泊まったのはパリのマレ地区に近い町中のホテル。次にモンパルナス駅にほど近いマンション、フランスの南西部のサルラではカントリーハウスのような歴史のある建物、カルカッソンヌでは普通の家族が所持する家の３階のフロアに、アルルでは袋小路にある一軒家の２階のベランダのある１室の他に、前の場所でスケッチしていて１日遅れでアルル入りしたＦへの今回の旅のお礼として古い貴族の家のような宿を予約した。そこに泊まったのは２人だが、翌日の朝食を４人分準備してもらえるよう頼み、合流させてもらった。

その朝、食事をしていると高い天井の壁の上方にある小さな扉から、気難しい顔つきの学者のようなおじさんが出て来て小さな螺旋階段を降りてきた。普通のホテルでないからこそ起こる出合いではないだろうか。そして旅の最後は１階のフロント横の床にガラスがはまり、そこから遺跡が覗けるホテルに泊まった。宿は17、18 世紀の建物なども当たり前でもっと古い建物などもホテルに使われている場所もあるようだった。２泊した宿もあったが計７か所の宿を予約し泊まるか、その中を見ることができた。いずれも４人が完全な別室にならないゆるくつながれる宿を選んだつもりだ。そして台所が付いているところでは地元のスーパーで買ってきたもので調理をしたこともあった。洗濯機が付属する宿を探したつもりが、残念ながらほとんどは案内の通りではなく、実際に洗濯機が置かれていた宿は１か所だけだった。

日本と違うのは部屋の価格が一人当たりではなく部屋単位なことだ。今は日本でもそういう場所もあるかもしれない。地方へいけばいくほど料金に朝食が含まれていたのがありがたかった。日本のようにコンビニエンスストアがどこにでもあるわけではない。パリ以外ではスーパーマーケットもどこにあるかもわからない。外食は、昼に３回、お茶２回、夜３回程で旅のわりに少なく済んだ。

アルルでは、友人M宅で朝食をごちそうになったり、その日の夕方アペリティフ（夕食前のお酒を飲みながらの軽い食事）にMの親友で近所に住む絵本作家Ｈさん宅に誘ってもらったりした。親友の知り合いというだけで４人の見知らぬ客を招いてくれたＨさんとその家族。３～４階建ての家の最上階のテラスで夕方のひと時を過ごさせてもらったのであった。やがて帰る前日になり、小さな山へのピクニックへ。この場所は旅に行く以前からアルルのMが好きな場所のひとつだと写真を送ってくれていた場所だ。石で積んで作った羊飼い小屋が目的地。その羊飼い小屋と空の青さがとても印象的な写真で一番楽しみにしていた場所だ。行く途中には、家を買うなんてまったく興味のなかったMが、ここなら買ってもいいかなというお気に入りの農家もあり見せてくれた。当日はフランスパンだけMに頼み、各々水を持参し、あとは山羊チーズ、レバーペースト、ビスケット等をもって出かけて、途中で分け合って食べた。そこあるのは、空と、ブドウ畑と、岩と木とまばらに立つ民家、背の低い植物に赤茶色の大地だ。途中ですれ違う人はほとんどいない。こんな自由な旅はしようと思ってもなかなかできるものではない。

山を下りて、野外の広いレストランのようなところで喉を潤す。満足感が心を満たした。そして最終日はマルシェも覗いた。日本にも朝市はあるが、魚や野菜が主だ。アルルのマルシェはパン、加工肉、野菜、手作靴、生活用品、服となんでもあった。もちろんワインも。のんびりとしているが活気があり、人々は思い思い買い物を楽しんでいる。Mは他の曜日のマルシェの方が大きいんだけど、これもマルシェはマルシェと残念そうに言った。でも私たちにとっては十分なマルシェだった。

旅のような暮らしのような旅もこれが最後だ。そう思うと、なんだかちょっと寂しさがこみ上げてきた。

（みぞかみ まきこ：朔北社）

司書の眼 第４６回

―― レゴリスから『宇宙兄弟』まで ――

鷹野　祐子

星出彰彦宇宙飛行士が 11 月に地球に帰ってくる。星出さんは、４歳の時にワシントン D.C. のスミソニアン博物館を訪れ、宇宙飛行士になりたいと思った。私も今回初めて知ったのだが、スミソニアン博物館は、一つの博物館ではなく、スミソニアン協会が運営する 19 の博物館並びに研究センターの施設群であり、多くはワシントン D.C. にあるが、ニューヨーク市、バージニア州、アリゾナ州、メリーランド州や海外にもあるらしい。スミソニアン協会はイギリスの貴族で科学者のジェームス・スミソン（1765 ～ 1829）氏が、「もし，子どもがいないまま死んだら，スミソン家の財産はアメリカ合衆国へ人類の知識の向上と普及のために譲る」という遺言によって設立された。実はスミソン氏は一度もアメリカを訪問したことがない。それなのに、科学と知識が世界中の人に利益をもたらし、それらを自由に共有することで世界をより良く変えてほしいと、全遺産をアメリカ合衆国政府に寄付したという。その時代、どれだけアメリカが自由の国と考えられていたのだろう。

国立航空宇宙博物館

スミソニアン博物館の中で宇宙関係の展示をしている国立航空宇宙博物館は、1940 年代から国立航空博物館として存在し、1976 年に国立航空宇宙博物館と改称した。星出さんは 1968 年生まれなので、４歳の星出さんが訪れたのは、おそらく国立航空博物館時代で、ライト兄弟が最初に空を飛んだ動力飛行機ライトフライヤー号と一緒に、月の石が展示されていたことだろう。国立航空宇宙博物館は開館以来「Apollo to the Moon」としてアポロ計画の展示をしていたが、博物館の改修工事に伴い 40 年間続いた展示は 2018 年に閉鎖された。

国立航空宇宙博物館には 1969 年に人類史上初めて月面着陸に成功したアポロ 11 号の司令船、1972 年アポロ計画の最後のミッションで、アポロ 17 号が月面から持ち帰って来た本物の月の石が展示されている。日本の国立科学博物館にもアポロ 12 号とアポロ 17 号で採集された石が展示されている。これは触れないのだけれど、スミソニアン博物館では実際に手で触れられるらしい。石があれば砂もあり、月の砂はレゴリスと呼ばれる。地球上の石英やガラスの粉とよく似ていて、珪肺（けいはい）症という炭鉱労働者に多い結節性の肺の繊維化が引き起こされる。宇宙飛行士が月面に降り立つと、粉塵は飛行士たちの宇宙服や計器類、充填材に入り込んだりする。付着した粉塵は、飛行士たちと一緒に船内に持ち込まれ、ヘルメットをはずした飛行士はそれを吸い込むことになった。アポロ 17 号の宇宙飛行士ハリソン・シュミット氏は、帰還後レゴリスのひどいアレルギー反応が出たことを報告し、月の粉塵が人体に与える影響を研究する必要があることを述べている。この邪魔物レゴリスであるが、月サンプルの分析から、重量比で 40 ～ 45％の酸素で構成されていることがわかっている。そこで現在、欧州宇宙機関のイギリスの技術者らが月の砂から酸素を生み出す研究を行っているという（Turning Moon dust into oxygen https://www.esa.int/Science_Exploration/Human_and_Robotic_Exploration/Turning_Moon_dust_into_oxygen）。現地調達できる資材から酸素を生成することができると、月面での長期滞在の可能性がてくる。

国際宇宙ステーション

アポロ計画は、大統領選において宇宙開発やミサイル防衛分野でソビエト連邦に勝ると公約し選挙に勝ったケネディ大統領が、1961 年に「今後 10 年以内に人間を月に着陸させる。そして安全に地球に帰還させる（“I believe that this nation should commit itself to achieving the goal, before this decade is out, of landing a man on the Moon and returning him safely to the

Earth.”)」と約束して、1972年にかけて行われ、ご存知のように1969年に有人月面着陸に成功した。

1984年にレーガン大統領は、「人が生活することのできる宇宙基地を、10年以内に建設する」と各国に呼びかけた。1993年にロシアも参加し、1998年に最初の基本機能モジュール（FGB）“ザーリャ（ロシア語で日の出）”が打ち上げられ、2009年に土井宇宙飛行士、星出宇宙飛行士、若田宇宙飛行士がそれぞれ関わった日本の実験棟「きぼう」が取り付けられ、2011年に国際宇宙ステーション（ISS）が完成した。

生粋の宇宙飛行士である星出宇宙飛行士は、高校生のときに、宇宙飛行士には英語力と国際感覚が必要であると判断し、シンガポールに留学した。その後慶應義塾大学理工学部機械工学科に入学し流体力学をテーマに卒論作成、４年生のときに、宇宙飛行士に応募しようとするが、「大学卒業資格」「要実務経験」という受験資格を満たさなかったので断念。卒業後JAXAの前身の宇宙開発事業団（NASDA）に就職した。NASDAに勤めている1996年に宇宙飛行士に立候補するも、最終選考で落選。この時に選ばれたのは野口聡一宇宙飛行士である。1997年にアメリカに留学し、航空宇宙工学修士課程修了。1999年に３度目の挑戦での宇宙飛行士に採用された。

2008年に「きぼう」の打ち上げのためにスペースシャトルディスカバリー搭乗、2009年にソユーズでISS長期滞在（125日間）、2021年４月からスペースX社の民間宇宙船「クルードラゴン」でISSに行き、現時点船長としてISSに滞在している。半年間の長期滞在後、2011年11月５日に帰還予定である。滞在中は日本の小学生とも交流して、YouTubeのJAXAイベントライブ配信専用チャンネルなどで配信、ライブで参加したり、アーカイブを見たりできた。特に、子どもから「宇宙ではコーヒー牛乳は混ざるの？」という質問に、実際に牛乳とコーヒー（もちろん宇宙食の）で実験してみたりしてくれていた。これをみた子どもたちは、本当に宇宙が身近に感じら、自分たちが大人の時代には自分が宇宙に立っている姿を感じられたと思う。実際に「#きぼうを見よう」で検索すると、夜空に浮かぶISSが地上から見える予測日時を調べることができるので、一度見てみてほしい。

「デジタルで読む脳」と「紙の本で読む脳」

2007年から連載されている、小山宙哉著『宇宙兄弟（SpaceBrothers）』というマンガがある。小栗旬と岡田将生の主演で実写映画化され、相模原市やいろいろな企業とコラボしているので、見たこともある人が多いと思う。この中の登場人物にエディとブライアンの兄弟がいるのだが、エディが1967年生まれ、ブライアンが1969年生まれ、まさしく星出宇宙飛行士世代なのである。二人とも素晴らしい船長であった。この話の中に、少しネタばれになるかもしれないが、カルロ・L・グレコというイタリア美男子が登場する。いかにもイタリアの伊達男らしくすべてにおいて詩的に言葉を並べ、情緒的に表現し、同僚のベティに「キレイな言葉を並べたって気持ちが入ってなきゃ伝わんない」と指摘されたりする。

最近読んだメアリアン・ウルフ著『デジタルで読む脳 X 紙の本で読む脳 ：「深い読み」ができるバイリテラシー脳を育てる』（インターシフト／2020）も、大変情緒的な表現ではじまる。メアリアン・ウルフ氏はUCLA大学院・教育情報学部の「ディスレクシア・多様な学習者・社会的公正センター」所長。専門は認知神経科学、発達心理学、ディスレクシア（読字障害）研究である。本書を読んでいただければわかると思うが、我々は日常たくさんのデジタル文書に触れることにより、「読む」能力が大きく変化している。デジタル的に提供されるニュース記事はどれも短文で簡潔。ともすれば要約されすぎている。また、長い記事であれば、俗にいう「ななめ読み」をして、文章を楽しむというより、いかに早く内容を掴むか、ということに注力していることがわかるだろう。大学生に同じ作品をデジタルと紙で読んでもらうと、紙の方が記憶・理解が上回っていたという。「読書をする楽しみ」「行間を読む」は脳がデジタル・モードに

なると失われてしまうのである。

実際、この本の前半の情緒的な表現による脳神経系生理機能の説明において、私は何度も挫折してしまった。各章が著者からの手紙形式で書かれ、論文上の情報ではなく、自分の体験として「デジタルで読む脳」と「紙の本で読む脳」を体験できる本であった。

Do the hokey pokey

「宇宙兄弟」でカルロは、医療担当としてメンバーの健康状態に常に気を配る。そして事故が起こり、メンバーが重篤な状態に陥ったとき、短く端的な言葉で言うのだ、「俺が助ける」。マンガというのは、行間としての絵があり、言葉と絵が調和してこその物語を作り出す。古来から、読書とは作家が背景やら色・香り・触感・食感・五感すべてを文字として起こし、紙の印刷文字として読んでもらうことにより読者に伝えた。読者の体験からくるイメージの再現を要求されていた。今や深い読みの楽しさを感じられる読者は少数なのかもしれない。

現代の創作活動において、個人によるマンガの創作が指数関数的に増加しているのは、デジタルネイティブの世代では、すでに脳がデジタル・モードになっているのではないか、とおもうのである。

（たかの ゆうこ：医学系研究所図書室）